



岡山大学
教授 伊藤 武彦



鳴門教育大学
教授 菊地 章

兵庫教育大学連合大学院は平成8年4月より博士課程学生を受け入れてきたが、設置前には設置準備委員会を構成し、担当予定教員の予備審査が始められた。当時は関係者の中に博士課程設置申請の経験者が殆ど居らず、ましてや審査基準ができていない時期の日本で初めての教員養成系博士課程の設置申請であり、各分野の世話人にとっては暗中模索の作業であったと想像される。申請準備段階では該当する研究分野の学会誌の例示を試みようとしたが、生活・健康系教育連合講座の研究分野はあまりにも多岐に亘っているため、学会誌の例示を行うことができなかった。結果として、申請に耐えられる適格教員の選定は、執行部と世話人に任せられ、大学設置審議会の資格審査に委ねることとなった。設置後3年間を経て大学設置審議会の管理から外れた後は、D丸合教員による教員資格審査が連合大学院内の審査基準表に基づいて行われ、生活・健康系教育連合講座では保健体育分野、技術分野、家庭分野の各々で客観的な教員資格審査基準として維持されている。当初は申請者自身が審査基準を見ても申請に値するかどうかを判断できにくい状況であったが、現在では研究分野の独自性を加味するとともに客観的な基準として構成されており、申請した際に認定されるかどうか申請者自身で予想しやすい教員資格審査基準となっている。

平成28年10月現在の生活・健康系教育連合講座の教員構成は、D丸合教員が30名（内、兵庫教育大学6名、上越教育大学5名、岡山大学12名、鳴門教育大学7名）、D合教員が16名（内、兵庫教育大学3名、上越教育大学5名、岡山大学3名、鳴門教育大学5名）となっており、他の連合講座と比較してもある程度の人数を維持できていると評価できる。また、4大学合わせた分野別人数としては、保健体育分野は35名中21名が、技術分野は20名中14名が、家庭分野は23名中11名が連合大学院担当教員となっている。なお、教授昇任の際に原則としてD合の認定を受けていることが望ましいとの内規を設けている大学もあり、4大学の教員は連合大学院担当の必要性を徐々に感じていると思われる。現在は教員の高齢化が進んでおり、D丸合教員数に比べてD合教員数が少なくなっている。また、これから数年間で多くの退職者が出るため、組織構成の維持についての不安もある。今後の教員養成系大学院・大学の改組が一段落して若手教員の採用が再開される暁には、生活・健康系教育連合講座の担当者数が増加すると期待したい。

生活・健康系教育連合講座の受験者・入学者については、二つの年齢ピークが見られるのが特徴である。一つは修士課程修了後の20歳代後半にあり、他は学校教員や大学教員の30歳代後半から40歳代にかけてとなっている。学校教員の合格者数は初期の頃からそれほど変化がないが、最近では大学教員の受け入れが徐々に多くなる傾向がある。博士の学位の取得については、平成26年度末までに46名が、単位取得後退学後に6名が、学位を取得している。また、論文提出による博士の学位の取得は14名となっ

ている。学生が標準修業年限で博士の学位を取得した割合は、連合大学院全体の平均が約3割に対して生活・健康系教育連合講座は約4割であり、比較的学位の取得率が高い連合講座となっている。ただ、学位取得者の中で標準履修年限の3年間で学位を取得した学生は46名中約6割の27名となっている。博士課程が浸透していなかった時代の博士の学位は完成された研究者に与えられる傾向が強かったが、最近では研究者の入口としての認識に変わりつつあり、その意味では学位取得の際の苦しい経験は研究者としての今後の糧になるとも思える。また、生活・健康系教育連合講座には保健体育・技術・家庭の研究分野があるが、特に保健体育分野には学校保健領域の養護実践に関わる研究者養成も含まれている特徴がある。保健体育分野の修了者の約3分の1が大学教員として養護教諭養成を担当しており、現在でも複数の現職養護教諭が在学中であり、高度の専門性を有する養護教諭養成にも貢献している。さらに、生活・健康系教育連合講座修了生全体では、大学等の研究機関に就職している修了生が25名と多い。この中で元々は大学等の所属であった者は4名であり、多くは修了後に大学等へ就業したことが分かる。加えて、博士（学術）の取得者は12名となっており、外国人の3名を含めて主に教員養成系大学以外の大学等に就業している。学生の在学中の外国での活動として学生国際学会等派遣や国際インターンシッププログラムがあるが、生活・健康系教育連合講座の学生は他の連合講座に比較して多く申請しており、積極的に国際学会に参加したり外国での研究を行ったりして、グローバル化に対応した資質向上を行っていると思われる。

生活・健康系教育連合講座ではこれまで優秀な学生に恵まれており、指導する側には研究者としての生き甲斐が生まれ、指導される側には自己の成長を自覚できる満足感が生まれてきたと評価できる。生活・健康系教育連合講座の在学生・修了生の一部の方の感想を以下に挙げる。

- ・県の交流人事として附属学校教員になっていた際に連合大学院博士課程に入学したが、その後は教育委員会の指導主事を担当し、かなりハードな学生生活を送った。また、家庭奉仕ができないで研究に没頭した。現在は教員養成学部の教員として勤務しているが、最近の教職大学院化を例とする実務的なアプローチによる能力向上は、将来かなりの問題が生じてくると思われる。その意味で、連合大学院の教育実践学をベースとしたアカデミックな研究指向は、研究者養成のみならず学校教員の職能向上の観点からも重要と思える。
- ・家庭に小さな子どもが居る状態での博士課程の学生生活はかなり大変であった。ただ、指導教員の学校教育改善に関わる壮大な夢を感じ取ることができ、自分の知的好奇心が満たされることが博士の学位の取得の原動力となった。また、国際会議への参加は連合大学院からの助成があり、かなり助かった。外国に行き、学会で発表することにより、自分の成長を実感できた。また、教材開発も国際的な視点から考えることができるようになった。
- ・本連合大学院の指導方法として、副指導教員制度がある。これは、主指導教員のみからの指導だけではなくて、副指導教員からは幅広い視点からの助言を戴け、自分の研究を広い視点から客観的かつ批判的に見つめ直すことができ、非常に有益であった。
- ・まず、研究の捉え方について勉強になった。表層的ではなくて、本質的に物事を捉える能力が身に付いたと思われる。主指導教員とは距離的にかなり離れていたが、時間をかけて指導を受け、論文になりそうもなかった内容が徐々に形を成し、最終的に内容のある論文に変わっていったことは有益だった。また、論文の査読者への回答を作成する際に、回答書を査読者がどのように読むのかとの指導を受けながら採択に至ったことで、2本目以降の論文執筆に繋がったと思える。また、休日返上で指導

して戴いたことにも感謝したい。

- 修士課程からの研究の延長として論文提出による博士の学位を取得しましたので、少し長い期間主指導教員から指導を受けました。学会で発表する頻度が多く、厳しい研究生活を送りましたが、投稿して論文が掲載されるとその苦勞が報われました。主指導教員の指導には頭が上がりません。また、公聴会・審査会の際には他大学の先生方も審査に加わって戴き、厳しいながらも確なアドバイスを戴いたことは、自分としては非常に大きなハードルを乗り越えた感覚で、研究生活の中で自信を持って次に繋がるものになりました。
- 当初は自分の研究スタイルから研究成果を博士論文に仕上げることは無理と考えていたが、ある日声をかけて戴き、無理を承知で挑戦することにしました。教材作成に終始していた状況から論理的な展開に至る博士論文を仕上げることは大変でしたが、結果として自分の教育研究の核が築けました。

これらの感想に見られるように、コメントして戴いた方々は、博士の学位を取得したことが研究人生の中で有益であったと評価しているようである。生活・健康系教育連合講座は基礎学問とは異なり応用学問の傾向が強いため、研究の内容自体が自己の成長に直結するものと思える。教員養成系学部での教員としての基礎的素養の習得、修士課程での研究者としての素養の育成、博士課程での高度な学問体系の習得、さらにはその後の学校教育への子ども達への教育実践としての還元や教員養成系大学・学部の教員としての次世代教員の育成等の循環型のシステムの構築が完成している。今後も生活・健康系教育連合講座がさらに発展していくことを望む。